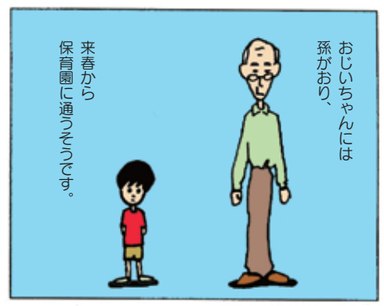
高齢者問題・・・大切なこと

「あるおじいちゃんのお話」

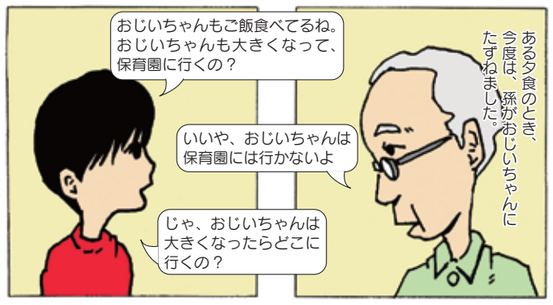


①

②

③

④



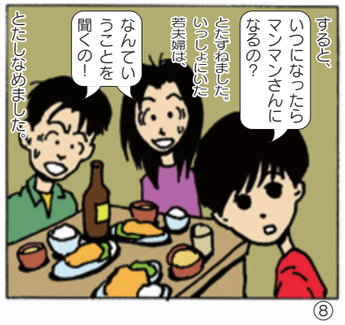
⑤⑥

高齢者問題を考えていく土台は、他の人権問題同様「いのちの尊厳」です。「いのち」の連続性・連鎖性は、ここに生命が存在するための基本中の基本です。この「いのち」への慈しみがおじいちゃんから孫へと見事に継承されているエピソードに、わたしたちの心も洗われるようです。

しかし、長寿大国といわれている我が国では、今夏、「所在不明の高齢者が多数いる」ということが深刻な問題として明らかになりました。さまざまな問題をうきぼりにした今回の問題の根本に、地域や家族という共同体の希薄さが生み出す危うさが指摘されています。

大分のある町では「黄色い旗」を地域全戸で掲げる高齢者見守り運動が取り組まれています。また、市内のある地域では、独居高齢者宅を中心に声をかける子ども会の「見守り隊」が活躍しています。「孤独化」の課題は、高齢者世帯だけにとどまりません。わたしたちが暮らす地域には、「虐待」におびえる子どもやドメスティック・バイオレンス（DV・夫

⑦



⑧

⑨

⑩

⑪

⑫

⑬

⑭

⑮

や恋人からの暴力）に傷つく女性、言葉の壁で孤立化した外国籍市民、さまざまなバリアの前に困惑する障害者、経済的弱者など、さまざまな人権課題をもって生活している人たちがいます。高齢者とのつながりが弱い地域は、すべての住民との絆も弱い地域といえます。

二〇五五年には、総人口にしめる六十五歳以上の高齢者は四割を占めるという超高齢化社会になるといわれています。多くの高齢者が地域にいるということは、尊敬に値する人生経験豊富な人たちがたくさんいるということです。「敬老」という言葉をおなじみのものにしてはなりません。齢を重ねていくことを心から喜びあえる真の長寿社会を実現させたいものです。

まずは、「長寿を見守る」家族や地域をとりもどすために互いに知恵を出し合う場として、各行政区にて開催される人権問題啓発市民懇談会を活用したいものです。「わたしにできること」「わたしができること」「みんなでできること」きっと見つかるはずです。